



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.128
2014.5.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 - 塚本師也

第13回 隣接する土器群との関係(1) - 勝坂式土器 -

阿玉台式土器は系統的な変遷だけではなく、外的要因による変化もある。まず、阿玉台式土器の西側、即ち関東地方南西部から中部地方に分布する勝坂式土器との関係を概観する。

勝坂式土器も阿玉台式土器も、五領ケ台式末期の「神谷原式」「竹ノ下式」と呼ばれる(今村1985)縄文地に有る節沈線(角押文)を施す土器群を母体とする。これらが無文化し、口辺部に楕円形区画文が形成され、勝坂式と阿玉台式が成立する。阿玉台式土器は、頸部を素文帯とし、体部に懸垂文を施す。一方勝坂式前半の土器は区画文を多帯化させる。貉沢式期は楕円形区画文(第9図1)、次の新道式期は三角形区画文(第9図2)を多帯化させる。貉沢式土

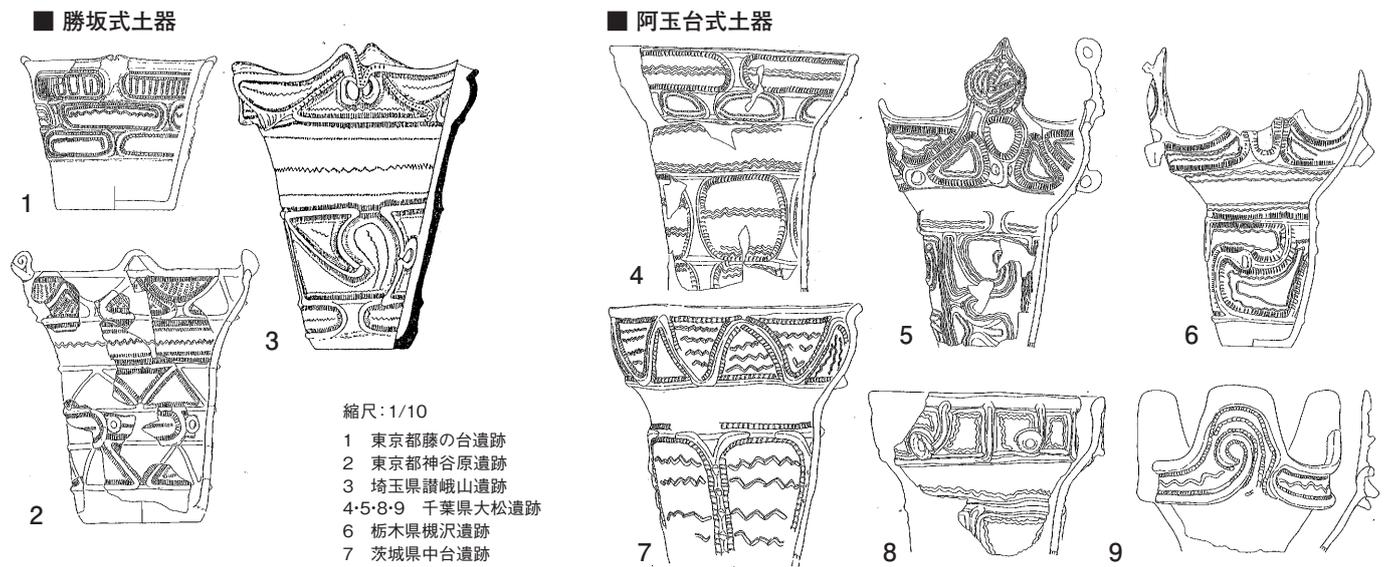
器は、神谷原式や阿玉台Ib式同様に角押文を施すが、後半には連続押捺手法による幅広のキャタピラー文が表れ、新道式段階にはベン先状工具の突き引きによる三角押文が加わる。阿玉台Ib~II式土器(阿玉台III式出現以前)には、勝坂式の文様要素はほとんど見られない。

阿玉台III式土器には、勝坂式の文様要素が見られる。阿玉台III式の爪形文は、勝坂式のキャタピラー文が起源であろう。体部に楕円形区画文を配す例(第9図4)は、多帯化した勝坂式の体部文様を受け入れたものである。三角形区画文も受容する(第9図7)。勝坂式では、キャタピラー文の脇に、三角押文(新道式段階)や沈線(藤内式期)を鋸歯状に沿わせるが(第9図3)、阿玉台

III式の爪形文の脇にも鋸歯状の沈線が見られる(第9図5・6)。区画や隆帯の接点に配されるトンボ眼鏡状把手(第9図5)や円環状の突起(第9図8)も勝坂式の特徴である(第9図2・3)。区画文を多帯化させた勝坂式の文様の下端は、隆帯が横位に巡るが、阿玉台式の懸垂文下端を画す隆帯(第9図6)は、これに起因すると思われる。人面状の把手も、変容して阿玉台式に受け入れられる(第9図5)。阿玉台式は、原則4単位構成であるが、阿玉台III式期以降は勝坂式同様の3単位構成が目立つ(第9図9)。

阿玉台III式期には、個体レベルではなく、阿玉台式土器全体が勝坂式土器の文様要素を受容し、これを阿玉台式的に配置して、新たな土器を産み出したようである。

第9図 勝坂式土器と勝坂式の文様を受容した阿玉台式土器



縮尺: 1/10
1 東京都藤の台遺跡
2 東京都神谷原遺跡
3 埼玉県讃岐山遺跡
4・5・8・9 千葉県大松遺跡
6 栃木県機沢遺跡
7 茨城県中台遺跡

[参考文献]

今村啓爾、1985、「五領ケ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」[東京大学文学部考古学研究室研究紀要]第4号

[出典]

- 1: 藤の台遺跡調査会、1980、「藤の台遺跡」Ⅲ
- 2: 八王子市市門田遺跡調査会、1982、「神谷原」Ⅱ
- 3: 滝沢浩、1963、「埼玉県讃岐山遺跡の中期縄文土器」[考古学手帖]18
- 4・5・8・9: 財団法人千葉県教育振興財団、2011、「柏市大松遺跡」
- 6: 栃木県教育委員、1980、「機沢遺跡」員会
- 7: 茨城県教育委員会、1995、「中台遺跡」

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■阿玉台式土器 隣接する土器群との関係(1)-勝坂式土器- 塚本師也 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第121回) 青木一男 …2
■考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(第15回) 渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚 『星の古記録』 高橋 周 …3

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第15回)

渡辺 誠

17. 民具学への傾斜

ドングリ食などの民俗調査を進めるなかで、自然に関連する民具の研究についても関心を深めていった。宮本常一氏らによって1975年に日本民具学会が設立された。その第1回の集まりは東京青山の日本青年会館で行われご挨拶致した折に、同氏著『忘れられた日本人』10人の最後に登場する高木誠一氏が遠縁に当たると申し上げたところ、大変なつかしがり、以来いろいろと親しくお教をいただくことになった。

この本は柳田国男氏の地方のお弟子さん達を訪ねる旅を記したもので、常磐線の草野駅から北神谷の高木家まで、遠いところをよく歩かれたものだと思う。またその一つ手前に芳賀という集落があって、雄山閣の芳賀章内編集長の故郷であった。私の最初の著書である『縄文時代の植物食』、つづく『縄文時代の漁業』は、この編集長のお力添えが大変大きかった。私の本家のある磐井作とは小さな山の南北に当たり、同郷の後輩として温かく見守ってくれたのである。

さて柳田国男氏は、私の母校である慶應義塾大学で教鞭をとられていた時に、三陸海岸を北上して遠野村に至り、有名な『遠野物語』を著わしたのであるが、その時に若かりし時の恩師松本信廣先生がお供していたという。このことは先輩の近森 正氏の御教示による。そして拙論を松本先生にお送りしたところ、その道中で「ヒョウタンの分からない考古学者は駄目だ」という話も出たらしく、ドングリ食などを調べ始めていた私を励ますように、先生が御存命であったならきっと喜ばれたでしょうと言われたのである。

話の延長線上に、少し私的なことを記す。同じように慶應で昭和10年代に教鞭をとられた大山 柏先生がおられるが、そのお屋敷の前を通る時、母はここが有名な大山公爵のお屋敷ですよ、と教えてくれた。母はまさか息子が慶應に進学して考古学を学び、大山先生のお弟子さんでもある清水潤三先生にもお教を頂くと、夢にも思っていなかったに違いない。そして大山邸に勤めておられた竹下次作氏が、時折清水先生の研究室に見えられると先生に声をかけられ、埼玉県真福寺貝塚の幻の独鈷石の写真を頂いたりした。私しか持って

いない贅沢な写真である。

大学院を修了し京都に勤めた当初、大阪の古書店で大山史前学研究所刊の『埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告書』を入手したが、これには衝撃的な書き込みがあった。内扉には「謹呈 東木学兄」と記されているが、その余白には、別の字で、「何故に赤門攻略に努力せなければならぬか 血の戦いの影には何がかくされているか 二大疑問符を解く鍵は何時の日ぞ?」と記されていて、思いがけない学史の裏面をみたことであった。どなたが書かれたのか知りたいものである。

18. 近畿民具学会

1975年に日本民具学会が設立され、私は学生達とともにさっそく民具と考古学の会を立ち上げた。この時には常民文化研究所の河岡武春氏も参加して下さった。そして翌年に近畿民具学会が設立されると、私達はこれに合流した。しかし民具と考古学の会に参加してくれた学生達はその専門家にはならないまでも、今でも発掘に関心を持ち続けてくれていて、私の調査に同行してくれることもありありがたいことである。

近畿民具学会は、小谷方明・岩井宏実・角山幸洋先生などが親切に御指導下さり、月一回の見学会も楽しかった。池田満助・福田栄治・石沢誠司・宇野文男・伊達仁美・水口千里氏等には、その後名古屋へ転じてからも親しくさせて頂いておりありがたい。

さてここまで記してくると、多くの方々の御教導を仰ぎながら、まだまだその成果を発表できていないことに気づき、反省の念を禁じえない。とりわけ紙漉きの簀編みの調査の結果はまったくまとめていないのは申し訳ない限りである。

略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
平成元年4月 同上教授
平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイスバレット・サイト 121

松原遺跡 ～ 長野県長野市

青木 一男

■ 森嶋 稔先生と長野盆地の大規模調査

元長野県考古学会会長で小学校教師・故 森嶋 稔先生は、長野県千曲川のほとり上山田温泉近くの自宅で「千曲川水系古代文化研究所」を主宰し、地域古代文化研究と後進指導にあたられてこられました。先生は、長野県教育委員会の諮

問に応ずる長野県遺跡調査指導委員として、高速道や新幹線工事に先立って行われていた千曲川水系の大規模な遺跡発掘調査について、調査・研究・活用に関する考古学哲学を私どもに伝えてくださいました。若き日の私どもが、県埋文センター、長野市埋文センターともに、平成元年までほぼ無名で

ありながら、以後、沖積地深く眠っていた膨大な松原遺跡のデータと対峙し続けることができたのも、先生の御支援のおかげであると語っても良いでしょう。「研究、活用はどうなっていますか」 森嶋先生のそんな声が聞こえてきそうです。

■ 中央高地の弥生農耕定着期における栗林式文化

長野・群馬・埼玉県境甲武信ヶ岳に発し、新潟の海に下る千曲川、その水系に稲作農耕が安定的に定着するのが、弥生時代の中頃(栗林式文化)のようです。考古学研究者が長野盆地北部の中野市栗林遺跡から出てきた特徴ある土器様式を栗林式土器と呼び、栗林式土器を生活のなかで共有する時間空間の人々の文化を栗林式文化としてとらえました。

長野県北部の犀川・千曲川流域は、その文化圏の核となる地域です。標高300～700m代の中央高地に稲作農耕が安定的に定着した栗林式文化は、中野市柳沢遺跡での銅鐸・銅戈の発見から、青銅器を用いた西日本型の農耕祭祀を取り込むとともに、社会的には大陸系磨製石斧の生産・流通を展開する経済的中核センターとしての役割をはたしていたことがみえてきました。

栗林式土器は中央高地の千曲川・犀川流域のみならず、太平洋に流れる天竜川流域上流部にもひろがります。中央高地に接する北関東周辺部には、栗林式土器とひじょうに類似する群馬県の竜見町式土器をはじめ兄弟様式の土器が分布しています。このことは、栗林式文化の広がりや社会的影響を暗示しているのではないのでしょうか。

■ 中央高地の中核弥生集落としての松原遺跡

今日、中央高地の中核弥生集落遺跡として認識されている長野市松代町所在の松原遺跡は、1990年代の上信越自動車道建設に伴う調査や、周辺開発関連事業に伴う調査で千曲川沖積地、自然堤防地下深くから忽然と姿を現しました。

上信越自動車道長野インター東側で発掘された集落面積は、4.3haで、そこから推測される弥生中期栗林期の集落規模は南北約800m、東西約300mとおよそ20haのエリアが想定されています。高速道はこの集落の中央部を貫きましたが、残された集落域は現在の農耕地地下1.5mに眠っています。



▲松原遺跡県センター東調査地区 弥生中期集落 空撮

調査のなかから明らかになった栗林期の建物は、主に居住や工場の建物と想定される「竪穴式住居」約320軒、竪穴式住居とは構造や機能が異なると考えられる「平地式住居」約200軒、「掘立柱建物」約50軒であって、構成の特異性が指摘されています。その規模は、栗林式文化の集落としては最大規模であるばかりか、全国的にも屈指の規模と語っても良いでしょう。

■ 松原遺跡の集落拡大と石器生産

明治大学の石川日出志教授は、栗林式土器を4段階に時間区分されています。その時間区分から松原集落の動向を考察された石川先生は、栗林式土器第2段階に小規模に出現した松原集落が、栗林式土器第3段階に突然集落が拡大し、栗林文化終息期の栗林式土器第4段階にふたたび小規模になること、集落拡大期に村を取り囲む環濠と呼ばれる空堀をはじめ柵や塀の跡と想定される囲郭遺構がみられ、磨製石戈をともなっていることを指摘されています。

長野県埋蔵文化財センターの町田勝則調査課長は、栗林文化の大陸系磨製石斧生産の動向と石器生産における集落間ネットワークとその構造を明らかにしました。町田氏によれば、長野盆地の大陸系磨製石斧の生産には、「原材料の獲得から途中の製作工程までを集中的に行う」榎田拠点型集落と、「途中段階の未製品の獲得から製品仕上げまでを行う」松原拠点型集落がみられる生産として「生産的分業体制」を指摘しています。松原遺跡の竪穴式住居跡からは、加工途中の磨製石斧の未製品と研磨用の砥石が掘り出されていますので、この村の中で大陸系磨製石斧の仕上げ加工が行われ、他の村々に持ち出されていたことがうかがえます。

松原遺跡での石器生産と急激な集落拡大には相関関係がありそうです。そこであらためて感じることは、建物構造の均質性で、同時期の西日本の弥生拠点集落にみられるような大型建物やシンボリックな青銅器はみつきりませんでした。松原村に集住していた多くの人々。栗林式土器で煮炊きをし、青銅器祭祀から地域祭祀にいたる様々な祭りを行ったであろう彼らは、この村の中でどんな生活をしていたのでしょうか。そして、この村は、栗林式文化を共有する村々のなかでどんな役割をはたしていたのでしょうか。

■ 松原集落の弥生景観を子どもたちに伝えるために

松原遺跡の発掘調査と報告書作成事業に関わることができた私は、現在、小学校の教育現場にいます。その後の不勉強から松原弥生集落の風景を描けずに月日がたちました。

小学校の社会科教科書や資料集には、吉野ヶ里遺跡を思わせるような環濠集落が描かれ、弥生文化の様子を子どもたちに伝えていきます。松原遺跡の栗林期の弥生集落は、その規模や掘り出された石器や土器からも、栗林式文化において社会的にも経済的にも中核となる集落であったことはほぼまちがいありません。そんな信州の風土に位置付いた松原集落の

弥生景観を描いて信州の児童・生徒たちに伝えねばなりません。森嶋 稔先生からもそう語りかけられそうです。

信州の弥生文化をその土地の子どもたちに伝えるためには、まずは、長野県の小・中・高等学校の先生方に、松原遺

跡をはじめ県内の弥生遺跡の発掘や研究成果を伝えていかねばなりません。このエッセイもそんな思いで小学校現場から発信しています。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは菅谷通保さんです。

考古学者の書棚

「星の古記録」

斉藤国治著／岩波書店(1982)

高橋 周

考古学は基本的に地下に残された遺構や遺物に対して考究する学問である。今回、紹介する本は「古天文学」をテーマとするもので、考古学とは対極に位置する学問と言ってもよいかもしれない。すなわち、「古天文学」とは、現代の数理天文学の数式を援用することにより、過去の太陽・月・惑星などの位置や運行状態を推算する研究なのである。こうした天体の動向が当時の人々に与えた影響、いわんや考古資料に表出する影響を推し量ることはできない。しかしながら、地下に残された遺物を用いた人々が眼前にしたであろう天体現象を科学的に解説する本書は、足下を見ることの多い考古学者にとって良い刺激となる一冊ではないかと思う。

理論上では先史時代における天体現象の推算も可能ではあるが、本書では、歴史時代における天体現象の推算について、当時の史料との比較を通して考察を展開する。本書の構成は以下の通りである。

- 一 星月に入る — 星食
- 二 日蝕え尽きたり — 日食
- 三 歳星氏を犯す — 惑星の合犯
- 四 『明月記』の客星 — 超新星の爆発
- 五 光り物 — 流星と隕石
- 六 ハレー彗星 — その二千年の履歴
- 七 南極老人所星 — カノープス
- 八 シリウスはむかし赤かったか
- 九 ガリレオ衛星は中国で発見されていたか
- 十 科学の黒船 — 金星週日
- 十一 黒い太陽 — 本邦初のコロナ観測

以下、注目したい章について、紹介しよう。

第一章は「星食」、月が星(惑星または恒星など)を隠す現象について述べる。奈良時代の『続日本紀』には星食の記事が見られるが、星食とは、星が月のうしろを通過する場合と星が月の前面を通過する場合の二種類あると信じられていたことは興味深い。後者は現代の常識からすると信じ難いことであるが、紀元前1世紀の『史記』天官書という中国の天文書には見られる考え方で、江戸時代中ごろの幕府天文方・渋川春海も月よりも金星のほうが地球に近いと主張している。日本における天文学的な知識は中国からもたらされたもので、その影響の大きさがうかがえるとともに、現代の常識とは異なる前近代の感覚の好例である。

第二章は「日食」について述べる。オーストリアの天文暦学

者T・R・オッポルトツェルが紀元前1208年から後2161年までに地球上で起きるあらゆる日食を数値計算した『食宝典』という書物を著し、史料に記された過去の日食を確認することができる。日本最古の日食記録は『日本書紀』推古天皇36年(628)3月戊申条で、実際、推古天皇の小墾田宮があった飛鳥においては最大食分0.93の深い部分食が見られたと計算される。午前9時26分、飛鳥より南東の多武峯から高取山にかけての上空に三日月より細く欠けた太陽であったとされる。2012年に日本列島各地で観測された金環日食(食分0.94～0.94)は記憶に新しいと思うが、まさにその日食と同程度のもが見られたのである。そして、注目されるのは、この日食の4日後に推古は危篤状態となり、その翌日に崩御するのである。午前中にもかかわらず夕景のごとくなった日食に続く為政者の死、当時の飛鳥人はどのように感じたのであろうか。

第五章では、光り物として、流星と隕石の古記録について述べる。日本における流星記事の初見は『日本書紀』舒明天皇9年(637)2月戊寅条で、「大いなる星東より西に流る。すなわち、音ありて雷に似たり。時の人いふ「流星の音なり」と。また曰く、「地雷なり」と。ここにおいて僧旻法師曰く、「流星にあらず。これは天狗なり。その吠ゆる声、雷に似たるのみ」と。」する。2013年にロシアのウラル地方に落下し、その衝撃波により甚大な被害をもたらした隕石を彷彿とさせる記事である。流星を天狗とする僧旻の言葉は『史記』天官書に基づくものとされる。『日本書紀』の記事は編纂の際の加筆・潤色が指摘され、上記の推古天皇条の日食記事とともにその信憑性の検討を要するが、この記述は実際の天文現象の実見を反映させた可能性が高いであろう。

考古学の世界においては、自然科学的手法が積極的に導入され、大きな成果を得ている。今回紹介した「古天文学」は天体現象の推算による文献史料の検討であり、手法的に考古学と自然科学との関係に共通すると言える。そして、過去の人々が目にした天体現象を現在の私たちが経験する現象と関連づけることもできる。ただし、実際にその成果を歴史学ないし考古学的に援用することは困難であろうが、新たな視点を与えてくれる手法として、一度参照して頂ければと思う。

アルカ通信 No.128

発行日 2014年5月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : <http://www.aruka.co.jp>